



東西しらかわ小学校長会 広報部

第 10 号 令和5年 2月 1日
発行人 会長 井上 久仁夫

除雪を通して

東西しらかわ小学校長会副会長 室井 博人
(白河市立白河第三小学校長)

私事で恐縮ですが、私の実家は下郷町で今年で90歳になる父が住んでいます。今年も例年に漏れず雪が降りました。年末は降ってもそれほどではなく良かったのですが、年が明け1月2日には除雪機を稼働させる雪となりました。早速家の周りを除雪しましたが、いつも使っているわけではないので、私がやるとどうしても雪が5センチ以上は残ってしまいます。ところが、父がやるとほぼ1センチ前後で雪が掻かれます。私はどうしても下のコンクリートや石などに引っかかってしまうのではないかと恐れるあまり、あまり下に下げることができません。また雪も同じように積もっているわけではなく、屋根からの落雪によってポコポコしていて様に機械を同じ高さにすればいいわけではありません。地面についたり石を巻き込んだりすれば、回っているロータリー部分のネジが切れて回らなくなります。ですから、予備のネジを買っておき、切れると交換をします。そうわかってはいても私ではなかなか下に持つて行くことができません。父は上手に掻けるようになるまでに何本ものネジを交換したのだと思います。

本校では、今年1月に公開授業を行いました。「学級づくり」と「共に創り上げる授業の改善」を両輪として今まで実践を積み重ねてきました。「学級づくり」では、hyper-QUテストの活用や「ハッピータイム」での構成的グループエンカウンター

の実施を通して、児童同士の親和的なつながりや教師の児童理解を推進してきました。「共に創り上げる授業の改善」では「必要感」「一体感」「実感」を得ることができる授業改善を通して、主体的対話的で深い学びの構築を図ってきました。一昨年の前回は指導案もできあがり、後は公開を待つだけというところで「新型コロナウイルス」の影響で中止となってしまいました。今回はできる限り実施していきたいと考えていました。今までの研究成果を少しでも来校の先生方に見ていただければと教職員一同張り切って頑張りました。

今まで研究を進める中では、「現在働き方改革を進めている上で公開を行うことが必要かどうか。」という議論があったことも事実です。しかし、学校において一番大切なことは毎日の授業を通して、子ども達に確実な学力と生きる力を身につけさせていくことだと思います。そのために、教師は常に目の前の子ども達を適切に捉え、その上でよりよい授業を行うための教材研究や授業改善を行っていかねばならないと考えます。公開は授業改善に向けた一つの目標ですし、それを通して授業力を高めるための一手段と考えました。今回の公開を通して、多くの指導の先生方をお招きし、普段では得ることができないご指導をいただけたと思っています。

今、学校では若い先生方が主体となりつつあり、働き方改革のもと、なかなか今までの学校の文化を継承する時間の確保が難しい状況です。スクラップも必要でしょう。しかし、授業改善は今後も教師の主たる業務であり、授業改善を進める上での児童理解や教材研究といった努力は子どもと共に自分自身を成長させることにつながります。さらにはそのような努力を通して、画一的な授業から、個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへと転換を図る「学びの変革」につながっていくと考えます。このような考えをちよつとずつでも、自校の先生方に考えてもらえるよう働きかけていかねばならないと思いますし、考える場を作っていかなければならないことを強く感じています。

除雪の技も一筋縄ではいきません。週末だけの仕事ですが、「ただやればいい。」ではなく、少しでも技術を上げられるように試行錯誤してみようと考えています。

未来は明るい

おかげさまで

白河市立白河第一小学校長 加藤 正行

「白河の関」が高校野球の甲子園をきっかけに改めて注目を集めた令和4年夏。仙台育英高、須江航監督の「苦しい中で、でも本当にあきらめないでやってくれた…全国の高校生に拍手してもらえたら」のスピーチに感動しました。高校野球は、私に密だった青春を思い出させてくれます。また、「先生はどうして先生になろうと思ったのですか？」と子どもたちに聞かれ、私は、恩師にあこがれ、監督として甲子園出場を夢みたこと、しかし、度重なる軌道修正の結果、今に至ったことを子どもたちに話し、初心がまた鮮明になりました。

教員としての年月を振り返ってみると、一日一日は長いのに、一年一年はものすごく短かった。「授業が大事…」と偉そうなことを言いながら、自分自身満足のいく授業なんてほぼできなかった。自己採点は60点ぐらい。もっとやれたんじゃないか、と後悔しかありません。あきらめることも多々あり、心に描いた未来予想図を何度もかき換えました。結局、子どものノートにコメントしたり、教材教具をつくったり、授業のビデオを何度も見たりとか、地道なことがとつとも楽しかったし、喜びでした。

校長になり何人もの方から「昔の子どもと今の子どもは変わったでしょう？」と問われますが、私はいつも「子どもは変わっていませんよ。」とこたえています。子どもは学びたいと思っていて、純粋で、どんどん可能性を發揮しているからです。

そして、教師の情熱も脈々と受け継がれています。本校の若い先生方の教育実践はすばらしいです。教師として、誰一人取り残したくないという思いも変わりません。その姿が子どもたちにも魅力的に映り、「小学校の先生になりたい」と思いを描く子どもが何人もいます。

新時代は、いつだってその時その時にがんばる人たちがつくってきました。今、学校で子どもと向き合っている先生方、ブラックだと言われていても教師を志す若者はとてもたのしいです。私が目標とした監督さんのチームづくりの根底にあったのは「感謝の心」。今、全ての皆様に感謝し、これからも未来を創るがんばる子どもたちとがんばる先生方を応援し続けたいと思います。

白河市立白河第二小学校長 井上久仁夫

昭和60年3月末、初めてJR白河駅に降り立ち、新採用辞令交付式が行われる白河合同庁舎にタクシーで向かいました。そこで辞令をいただき、私を含め白河二小の新採用3名は迎えに来た校長先生に白河二小に連れてこられました。春休み中でしたが、多くの先生方が迎えてくれました。当時、本校に大学時代の部の先輩がいて、「忙しいけどいい学校だよ。水泳も陸上もソフトも全部優勝が期待されてるぞ。自分は転勤するけれどがんばれ。これ帰りの電車で・・・。」と500ml 6本を手渡されたことたことを覚えています。

思い起こせば、あれから38年、会津生まれの私にとって、縁もゆかりもない白河に住み着くことになるとは思ってもいないことでした。しかしながら、教職をスタートしたこの学校で退職というゴールを迎えることができることは大きな喜びであります。

振り返ってみると、

- ・ 毎年の研究公開を経験し、社会科と体育科の授業作りの楽しさを知り、教員として、社会人として様々なことを学んだ白河二小の4年間
 - ・ 指定を受けた国語科の授業研究と体育科の授業実践に取り組むとともに、毎週末先生方とテニスやスキー等に励んだ大里小での4年間
 - ・ 算数主任・体育主任として研究公開と授業作りに熱が入った棚倉小での6年間
 - ・ 日々の授業や学級作りについて先輩や同僚から大いに刺激を受けた白河一小での6年間
- その後の教頭時代を含め、幸いなことにどの職場でもよい人間関係に支えられ、「楽しかった」といえる日々を過ごすことができました。

また、教育事務所での勤務は、現場を離れて学校や教職を見つめる貴重な時間となり、多種多様の業務を通して全県の先生方と知り合うことができたことは、大きな財産となりました。校長としては、泉崎二小と白河二小に勤務させていただき、教育への情熱・研修意欲にあふれる先生方と一緒に学校運営ができたことは私の宝物です。

東西しらかわ小学校長会の皆様には、現場の様々な課題を共有し、支えていただきました。大変お世話になりました。ありがとうございました。

セカンドキャリア

新たな時代に向けて(復興と創生)

白河市立白河第五小学校長 嘉成 靖

セカンドキャリアとは、人生における「第2の職業」のことです。近年、定年をゴールとするのではなく、人生をより豊かにする手段としてセカンドキャリアを前向きに捉える風潮が広がりつつあります。そのような中、「60歳定年制」最後の年に定年を迎えることができたのもセカンドキャリアを考える良いタイミングとなりました。

これまでは、学校教育を通して社会貢献をしてきました。定年後は別な形で社会貢献ができたらし、一昨年頃からセカンドキャリアのことを考え始めました。そのためには、新たなスキルを身に付ける必要があり、資格を取得しようとするようになりました。そして、最終的には、退職後、専門学校へ行って資格を取得し、鍼灸師をめざすことにしました。

そのきっかけになった出来事が2つあります。

1つは、「東洋医学」のテレビ番組を見て、その素晴らしさに魅力を感じたことです。「西洋医学は、薬や手術によって直接病気を治療するが、東洋医学は体の不調を根本的に治す。健康上の最も多い悩みである『慢性痛』の治療法で世界で注目を集めているのが『鍼灸』である。」ということです。その言葉を聞いて、東洋医学を是非やってみようと思いました。

もう1つは、「習熟度別学習」での指導でした。白河第五小学校に赴任して最初に考えたのが、目の前の子供たちの学力を向上させたいということでした。校長自ら取り組むことによってその目的は達成させられるであろうと考え、算数科の習熟度別学習の指導をしました。子供たちとの授業は楽しく、教材研究をする楽しさも感じました。学ぶことで授業が充実し、もう一度学んでみたいという気持ちになりました。

この2つの出来事がセカンドキャリアの扉を開かせてくれました。退職したら鍼灸師の国家資格を取得するために、4月から3年間専門学校へ行くことにしました。若者と一緒に学び、3年後には国家試験に挑戦します。「背水の陣」セカンドキャリアを身に付け、第2の人生を充実させたいと考えています。

西郷村立熊倉小学校長 渡邊 康一

まだまだ先と思っていた定年退職が間もなくです。私は、今までお世話になり育てていただいた皆様に、少しでも恩返しができるよう、熊倉小学校での3年間は、これまでの集大成として学校経営や教育実践に取り組んできました。それは、新しい時代を見据えてのものであり、根底には「復興と再生」があります。

しかし、令和2年度の赴任当初から、コロナ対策に明け暮れ、臨時休校も重なったことで、思い描いた構想を進めることは困難になりました。それでも、教職員が一致団結して、それぞれのよさをいかしながら、創意工夫のもとでこの難局を乗り越えていきました。

このような中、私も「復興と創生」に向けて、まずはコミュニケーションにより、一人一人に寄り添い、現状をよく把握していくことにしました。そして、子どもとの関わりでは、毎朝の教室訪問、校長室での給食、校長室の場づくり(子どものプレゼントの展示・空気風呂・テント設置)など、保護者との関わりでは、個別懇談後の校長室での懇談、学校内外での積極的な声かけ、HPブログアップなどです。このことにより、子どもや保護者との距離感が縮まり、信頼関係も少しずつ構築することができ、新たな時代に向けての取組(CS・ICT・教科担任制・SDGs・くまっこ教室等)が進んでいきました。

また、CSにより学校と地域の連携・協働(地域人材の活用・本物の体験活動・地域貢献など)が進み、学校は地域に守られているという安心感が教職員や保護者の中で生まれ、CSの成果を県内外に広く発信することができました。

新たな時代に向け、本校の子ども達からは「将来は西郷村のために役に立ちたい。」「地域の方にたくさんお世話になり、今度は自分の番なので頑張りたい。」など頼もしい感想がたくさん聞かれました。福島の復興・創生はまだまだ続きますが、新たな時代となり、次の世代に次の物語「ファンタジー」を託していきたいと思えます。

最後に、これまでご支援・ご協力いただいた多くの皆様に感謝申し上げます。長い間、ありがとうございました。

庭先の梅花

棚倉町立棚倉小学校長 鈴木 雅人

拙宅の庭の梅花の芽がほんのりと赤く色づいてきている。寒さの底は、これからなのだろうが、植物の逞しさを感じる。この花が咲く頃はもう定年退職間近である。

「定年退職」と言われても、ピンとこなかったというのが正直なところである。つい先日までは……。しかし最近、退職に関する書類の記入や退職説明会なるものがいくつかあった。それらを経ていると、なんとなく「定年退職」を意識せざるを得ない状況になるというのが正直なところである。

今の時代、校長は日々の学校経営上の課題に向き合い、対応策を指示していると、その日を過ごすのがやっとという感じであり、「退職の年は、平和に穏やかに……。」そんなことが言える悠長な時代ではない。退職を意識せず、学校を去る最後の最後まで学校の課題に心を砕いて去って行くというのが本当のところではないかと思っている。

ところが、人間は弱いものである。退職書類だったり、退職説明会だったりを繰り返していくと「退職」という二文字を意識せざるを得なくなってくるのである。「退職」という寂しさに吸い込まれていくのである。

そんな時、ふと自分のキャリアを顧みるようになった。自分は、大学で特別支援教育(当時は養護教育)を専攻していながら、それを生かし切れずに小学校教育で講師を始め、小学校教諭、社会教育関係、指導関係、管理関係と自分の思いとは徐々にかけ離れた職域に身を置いてきた。自分の理想とは違った世界がそこにあったが、へこたれることなく、置かれた場所で咲こうと努力してきたつもりである。その間、どれだけの方々にお世話になったことだろう。感謝しかない。上司、同僚、後輩、子どもたち、保護者、地域の皆さん、関係機関、業者の皆さん、ありとあらゆる人と縁を繋いできたことを今幸せに思える。

そんな時、庭に目をやると梅花の芽が目映る。この3月、感謝の気持ちと共に終わりの花を咲かせたいと思っている。寒い冬を乗り越え、春を告げるたくましい庭先の梅花のごとく。

楽しかった38年間に感謝

矢祭町立矢祭小学校長 伊藤 弘行

『南至』に原稿を書く機会をいただき、改めて38年間を振り返ることができた。いろいろあった中から心に残る出来事を4つ書いてみた。

①昭和60年4月、県南の小学校に赴任。当時、その学校には、「ふるさと交歓会」という行事があり、夏休みや春休みに東京と福島で交互に民泊し合っていた。大学卒業から赴任までの間、特にやることも無かったので、誘われるまま一緒に東京に行くことになった。東京では大歓迎会が行われ、着任前からすっかり保護者や児童と顔なじみになっていた。それが教員生活のスタートだった。

②平成6年、2校目では理科部の県大会が開催された。私は理科主任となり、全学年の理科に関わることになった。当時の校長先生から「理科の県大会は全て伊藤先生に任せる」と言われ、この年は学級担任を外れ、毎日理科の事だけ考える日々が続いた。元々理科が大好きだったので、幸せな1年だった。夏休みも後半、秋の県大会に向けた指導案の検討に入った。職員室で連日夜遅くまで指導案検討を行った。そんなある夜、10時過ぎに雷が鳴りだし、突然停電になってしまった。普通なら「今日はここまでにしましょう」となるところだが、その時の私には途中で止めるという気持ちはなかった。理科室からロウソクを十数本持ってきて、テーブルに立てロウソクの明かりで指導案検討を続行した。大変だったけれど楽しかった記憶しかない。

③平成10年、3校目。冬の宿泊学習でスキー教室を実施した。子ども達への安全指導は十分できていたが、私自身が大転倒、右膝靭帯断裂の大ケガをしてしまった。学校を休むことは無かったが、車を運転できず、学校への送迎等で先生方にとってもお世話になってしまった。

④平成23年3月11日、教頭として赴任した勿来第三小学校で東日本大震災に遭った。校長先生は、会津の自宅に帰っていたので、避難所開設や運営のため、学校に泊まり込む日が続いた。幸い児童や職員に人的な被害を出さずに済んだ。

他にも数え切れない思い出があるが、いつも児童や先生方、保護者、地域の方に支えられてきた。出会ったすべての方々に深く感謝したい。